

【論文】

高等学校の音楽教師の歌唱指導に関する調査研究

澤田 育子

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻

要約

本研究は、公立・私立高等学校（定時制・通信制を含む）の音楽教師に対し質問紙調査を行い、高等学校における歌唱指導の問題点を探り、有効な指導法につながる手がかりを見つけることを目的とした。

本調査の結果、大学や個人レッスンで学んだ体験のみが歌唱指導の根拠としている教師が多かった。また、声楽専攻の教師とその他の教師とは、具体的な指導法に違いがあることも示された。

教師の属性と発声法の関係について分析した結果、20・30代の教師は独唱で母音の響きを重視して指導していないこと、声楽専攻の教師は合唱で声量を上げる発声法は重視していないことが示され、年代や専攻の違いによる指導法の差異があることが示された。さらに、レッスン歴が短い教師は独唱で共鳴腔を重視することや、参考文献・指導有りの教師は合唱で共鳴腔を重視していることが示され、独唱・合唱初心者への指導に共鳴腔を意識させることが効果的で、しかも声楽専門でなくても成果がある指導法であることも示唆された。

今後は、「母音の響き」と「共鳴腔の意識」を手がかりとした歌唱指導法の検討とそれを実証していく実験研究が必要であろうと考える。

キーワード

質問紙調査、高等学校、音楽教師、歌唱指導

I. はじめに

高等学校の芸術（音楽）の学習領域は、「A表現」及び「B鑑賞」があり、「A表現」の内容に（1）歌唱、（2）器楽、（3）創作がある。（1）歌唱の発声に関する内容には「イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。」がある。曲種に応じた発声とあるが、学習指導要領¹には曲種に応じた発声についての指導のもととなる理論が明記されているわけではない。さらに、教師には専門分野があり、歌唱に関する学習経験値は声楽専攻とそれ以外の専攻とでは大きな差があるにもかかわらず、教師になればすべての音楽教師が歌唱の授業を指導しなくてはならない。音楽専門の大学や短期大学の声楽専攻の授業では、参考とする教科書は特に指定されておらず、もともとなる指導法は授業者自身の学習から生み出されていると思われる。そのため、現場では発声指導について指導法がわからず悩んでいる教師がいる一方、自分の経験に基づいて指導している教師もいる。

若井(2014)²は小学校教員養成課程で学ぶ学生にアンケート調査（回答者45名）を行い、歌唱教材を歌うことで悩んでいることについて記述させている。その中で、発声の問題が半数を占めていた。具体的には「高い声が出ない」、「低い声が汚い」、「声が通らない」、「頭声と地声のつながり目がうまくいかない」などがある。つまり、それらを解決するためのノウハウがわからず悩んでいると考えられる。

内田・大川(2019)³は保育士養成課程の短大生17名

と高等学校生徒13名に対し、独自の発声テキストを作成し事前と事後のアンケート調査を行った。事前アンケートで、どんな声をめざしたいかという問いについて、高校生は、「透き通る」、「透明感」、「きれいな声」という記述が多く、短大生は、「高い声」、「高音・低音がしっかり出る」、「音域広く」、「きれいな声」という記述が多かった。これらの記述から、自己の発声を客観視することはできており、どのように改善したいかについての考えをもっていることがわかる。

一方、早川・虫明(2012)⁴が行った教師側の歌唱に関するアンケート調査においては、「楽しんで歌う指導」、「やる気にさせる歌唱指導」、「歌唱が苦手な生徒への指導」といった記述が多く、「きれいな声」、「美しい声」についての具体的指導法を学びたいという記述が少なかった。この調査研究では、歌唱指導における問題点は明らかにされてはいなかった。

そこで、現場の音楽教師が具体的にどのような指導を行っているか、また指導する教師の専門性によって指導に差があるのかなど、教師の属性と指導内容や指導方法との関係について調査し、実態をつかむ必要があると考えた。

本研究では、高等学校における歌唱指導についての質問紙調査を行い、具体的指導方法について、どのような傾向がみられるか分析し、歌唱指導の問題点を探り、有効な指導方法につながる手がかりを見つけることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

A 県の公立・私立高等学校（定時制・通信制を含む）のうち、芸術科目で音楽を開講している高等学校 64 校、72 名の音楽教師を対象とした。

2. 調査方法と調査時期

郵送法による質問紙調査(2020年1月18日送付、2月18日締切)を実施し、47名から回答を得た(回収率65%)。

3. 調査内容と調査項目

調査は無記名とし、個人情報保護に努めると明記した。調査内容は、まず、(1)音楽教師の属性の9項目を尋ねた。その内訳は、職名、性別、年代、部顧問、主専攻、大学時代のレッスン経験、大学時代のレッスン年数、大学外のレッスン経験、大学外のレッスン年数である。

次に(2)発声や歌唱指導において参考としている指導法や文献について書いてもらった。

続いて、(3)「独唱」と「合唱」で、それぞれの「良い声」について尋ねた。声の良さを表現する語句を、教科書や指導書などを参考として、次の選択肢から選ぶように設定した。「響く声」、「透明感がある声」、「音域が広い声」、「柔らかい声」、「輝かしい声」、「優しい声」、「ダイナミクスがつけられる(声量がある)声」、「支えのある声」、「その他」の9つで、回答は重視している順に3つを選ぶ形式で調査した。

さらに(4)歌唱授業の主な目的を尋ねた。平成21年3月告示の学習指導要領¹をもとに²8項目の目標を掲げ、回答者が授業で重視している項目を3つ選び○をつける形で問うた。

次いで(5)「独唱」と「合唱」で重要だと考える内容について、表現と発声それぞれ分けて○をつける形にした。これは、教科書や指導書などの語句を参考として選択肢を設定した。なお、この設問の○は各項目2つまでとした。表現関係の語句は「自己のイメージを生かす表現」、「作詞・作曲の意図をくんだ表現」、「フレージング」、「ダイナミクス」、「語感」、「その他」、さらに合唱では、「まわりの声を聴くこと・一体感」、「ハーモニー」、を加えた。発声関係の語句は「呼吸法」、「姿勢」、「顔の表情」、「身体の支え」、「母音の響き」、「共鳴腔の意識」、「声量」、「その他」である。

最後に(6)自由記述で、「歌唱の授業で、生徒の声が良くなったと実感を持てた指導法」、「歌唱の授業で、遠くに響く声にするための指導法」、「その他、歌唱指導についての意見」を尋ねた。

4. 分析方法

優位順を記入する質問項目については、1位が3点、2位が2点、3位が1点とした。％は、回答者(n=47)全員が1位を付けた場合の最高得点(141)に対する割合とした。複数回答(2つまで)は全回答者数に対しての割

合とした。

統計分析にあたっては、IBMのSPSS Statistics Ver.26を用いた。クロス表の分析では、全体の人数が少ないことを考慮して「Fisherの直接法」を用いて検定を行った。

III. 結果

1. 全体集計

(1) 教師の属性について

教諭と講師数の割合は53.2%と46.8%でその差は少ないが、男女数では女性が80.9%と多く、年代別では50代が34.0%と他の年代に比べ多かった。部顧問は吹奏楽部が40.4%、合唱部は19.1%で、吹奏楽部が多かった。大学の主専攻はピアノが38.3%と最も多く、次いで声楽が34.0%であった。大学での声楽レッスン経験有りは93.6%で、ほぼ受けていた。大学で声楽を習った期間の平均年数は2.7年であった。大学外の声楽レッスン経験有りの教師は71.3%であった。

(2) 発声や歌唱において参考としている指導法や文献について

参考文献・指導法が無いと答えた教師は38.0%いた。さらに、参考文献有りの62.0%のうち、大学で習ったことがベースになっている教師が73.0%で一番多く、次いで声楽家の35.0%で、著書は0.0%であった。

(3) 教師が考える独唱・合唱での良い声について

表1は音楽教師が考える独唱・合唱での良い声についてである。独唱・合唱の両方に「響く声」を挙げている。これは他の項目と明らかに差があった。また、どちらも第2位に「支え」を挙げており、身体の支えが感じられる声が良い声だと考えていることがわかる。独唱・合唱ともに美しい声と判断する基準に差異がないことがわかる。

(4) 授業での歌唱指導の目的について

表2は教師が歌唱指導の目的と考えていることである。この質問では、「自己のイメージをもって表現すること」が58.9%、「曲想と音楽の構造や歌詞について理解すること」が55.3%で回答割合が多く、「曲種に応じた発声について理解すること」は8.5%、「曲にふさわしい発声の技能を身につけること」は10.6%と割合が少なかった。歌唱指導の授業は、歌唱技術に関して指導すること以上にイメージや曲想を重視していることがわかった。

(表1) 独唱・合唱での良い声 (n=47)

	良い声の基準	回答得点	%
独唱	響く	109	77.3%
	透明感	22	15.6%
	音域	9	6.4%
	柔らかい	20	14.2%
	輝かしい	9	6.4%
	優しい	1	0.7%
	ダイナミクス	29	20.6%
	支え	57	40.4%
	その他	10	7.1%
	合唱	響く	99
透明感		25	17.7%
音域		7	5.0%
柔らかい		37	26.2%
輝かしい		4	2.8%
優しい		1	0.7%
ダイナミクス		26	18.4%
支え		49	34.8%
その他		17	12.1%

注1) 回答得点とは優位順(1~3)を1→3、2→2、3→1と得点に置き換えたもの
 注2) %は最高得点141に対する割合

(表2) 授業での歌唱指導の目的 (n=47)

指導目的	回答得点	%
自己のイメージをもって表現すること	83	58.9%
曲想と音楽の構造や歌詞について理解すること	78	55.3%
曲種に応じた発声について理解すること	12	8.5%
様々な表現形態による歌唱表現について理解すること	19	13.5%
曲にふさわしい発声の技能を身につけること	15	10.6%
他者との調和を意識して歌うこと	41	29.1%
表現形態の特徴を生かして歌うこと	8	5.7%
その他	10	7.1%

注1) 回答得点とは優位順(1~3)を1→3、2→2、3→1と得点に置き換えたもの
 注2) %は最高得点141に対する割合

(5) 「独唱の授業で重要と考える表現」、「独唱の授業で重要と考える発声」、「合唱の授業で重要と考える表現」、「合唱の授業で重要と考える発声」について

表3から、独唱と合唱の授業で重要と考える表現を比較すると、独唱では「自己のイメージを生かす」が63.8%と回答の割合が多く、合唱では「まわりの声を聴くこと・一体感」が57.4%と割合が多く、独唱と合唱の違いが明確に表れた結果となった。

独唱と合唱の授業で重要と考える発声を比較すると、独唱では「呼吸法」が51.1%、次いで「姿勢」が29.8%、合唱では「呼吸法」が42.6%、次いで「姿勢」が31.9%と割合が多かった。独唱と合唱の発声で重視する項目に差はほとんどなかった。

(表3) 独唱・合唱の授業で重要と考える表現・発声

項目	内容	回答数	%	
独唱表現	①自己のイメージを生かす表現	30	63.8%	
	②作詞・作曲者の意図をくんだ表現	28	59.6%	
	③フレージング	16	34.0%	
	④ダイナミクス	6	12.8%	
	⑤語感	8	17.0%	
	⑥その他	0	0.0%	
独唱発声	①呼吸法	24	51.1%	
	②姿勢	14	29.8%	
	③顔の表情	4	8.5%	
	④身体の支え	12	25.5%	
	⑤母音の響き	10	21.3%	
	⑥共鳴腔の意識	11	23.4%	
	⑦声量	10	21.3%	
	⑧その他	1	2.1%	
合唱表現	①皆でイメージを考えた表現	14	29.8%	
	②作詞・作曲者の意図をくんだ表現	14	29.8%	
	③フレージング	5	10.6%	
	④ダイナミクス	4	8.5%	
	⑤語感	4	8.5%	
	⑥まわりの声を聴くこと・一体感	27	57.4%	
	⑦ハーモニー	18	38.3%	
	⑧その他	0	0.0%	
	合唱発声	①呼吸法	20	42.6%
		②姿勢	15	31.9%
③顔の表情		7	14.9%	
④身体の支え		12	25.5%	
⑤母音の響き		12	25.5%	
⑥共鳴腔の意識		12	25.5%	
⑦声量		8	17.0%	
⑧その他		0	0.0%	

注1) この質問に対する回答は複数回答(2つまで)である
 注2) %は全回答者数47に対する割合

(6) 自由記述「歌唱の授業で、生徒の声が良くなったと実感が持てた指導法」について

表4は自由記述の「歌唱の授業で、生徒の声が良くなったと実感が持てた指導法」について、声楽専攻の教師とその他の専攻の教師に分け、さらに大学外でのレッスン年数を載せた。声楽専攻の教師で自由記述に回答した教師は大学外でもレッスンを受ける年数が多かった。

具体的指導法の記述内容について、声楽専攻の教師は、「深く息を吸う」、「のどのアキを作るため、笑ってほほを上げる」、「軟口蓋をあくびののどにする」、「ハミング」、「ため息」、「呼吸」、「鼻から吸う」、「支え、広がり体操」、「母音のベクトル」、「体の使い方」、「体操」、「声の響く生徒の真似」、「口が適度に開いた状態で息が気管を通り喉を通過して出てくるという感覚を意識」という

(表4) 自由記述 (下線は筆者)

専攻	大学外 レッスン年	歌唱の授業で、生徒の声が悪くなったと実感が持てた指導法がありましたら教えてください
音楽専攻	7	クラス授業で(深く息を吸う、笑う顔で)、個人レッスンで(のどのアキを作るため、笑ってほほを上げる、軟口蓋をあくびのどにする。基本はハミングからのスタート、あるいは、ため息が基本)
	10	呼吸を意識すると発声が変わってくる。鼻から吸うということをよく言う
	26	アンサンブルでアカペラハモリ曲をステップ①~⑥までを順に練習したら声安定してきた。このとき、支え、広がり、体操も取り入れた
	37	歌唱実技テストを行い、一人ずつ短いアドバイスをしている。生徒によってはそのアドバイスが効果的な場合もある
	未記入	呼吸法、母音のバクトル、体の使い方、体操
	6	声の響く生徒の真似をさせる。口が適度に開いた状態で息が気管を通り喉を通って声が出るという感覚を認識させたときなど。出しやすい音域の感じ(喉の様子や息の流れなど)を保ちつつ音を順次上下させたときなど
	20	基本的な発声をした後、一人一人音楽に向き合わせる
	0	日々試行錯誤です
	3	息を流すためにリップロールで歌わせてから普通に歌う
	0.4	プロの音楽家の真似をしてみる指導
その他の専攻	2	歌唱の前に歌詞の内容についての意見交流を行うと、声がまとまり声量や勢いのある合唱になった。また、何度も人に聴いてもらう機会をたくさんとることも効果的であった
	2	生徒にイメージをもたせたら声が悪くなったと感じることが多い
	2	ハミングで歌う。恥ずかしさを取り除くために、交流をして仲を深めると良い
	未記入	ハミングで発声してから声を出す。録音した生徒自身の歌唱を聴かせてから歌う
	0	呼吸の練習をする。何秒ですって何秒ではなく、どのような練習。一人ずつ発声を見る。(ほかの生徒には別の課題を出す)
	2	母音で口を大きく開ける。音程をつけずに、大きな声を出す。口の開け方、姿勢、呼吸に注意
	0	腹式呼吸の意識。声を飛ばすイメージ
	0	口形、響きの意識
	1	他団体、学校のDVD等を見せて良いところに気づかせる。生徒が良い声を感じるためには、小・中学校の音楽経験だけでなく、多種の音楽曲を聴かせ、目標となる声を見つけることが必要
	0	なし。どんどん声が悪くなってしまっている
1	姿勢、腹式呼吸、口を開けるの3つです。体のほぐし、呼吸練習、大きな口でロングトーン等の練習で声の響き、声量の変化がある。クラスの前で発表させるのも効果的。	
10	1.喉を開ける。2.あくびの口。3.おなかの支え。遠くへ「オーイ！」と叫ぶ	
0	専門が音楽なので深く掘り下げて指導していません。教科書のボイストレーニングはします。	
0	鼻腔を意識し、響きの点(共鳴腔)に音(声)を当てることを常に実践した。響きを下に落とさないように、身体から上で歌う意識をもつようにすること。横隔膜を広げ大きく吐く(たくさん呼吸が体をめぐるように)ことを体で覚えてもらうこと。呼吸がすべての原動力であることへの意識確認	

注1)大学外レッスン年とは、大学以外で声楽のレッスンを受けた経験のある教師が習った期間の年数

記述があった。一方、その他の専攻の教師は、「リップロール」、「プロの音楽家の真似」、「歌詞の内容についての意見交流」、「何度も人に聴いてもらう」、「イメージをもたせる」、「ハミング」、「呼吸」、「母音で口を大きく開ける」、「音程をつけずに、大きな声を出す」、「口の開け方」、「姿勢」、「腹式呼吸」、「声を飛ばすイメージ」、「口形」、

「響きの意識」、「他団体、学校のDVDを見せて良いところに気づかせる」、「目標となる声を見つける」、「体のほぐし」、「大きな口でロングトーン」、「クラスの前で発表」、「教科書のボイストレーニング」、「鼻腔を意識し、響きの点(共鳴腔)に音(声)を当てる」、「響きを下に落とさないように、身体から上で歌う意識をもつ」、「横隔膜を広げ大きく吐く」、「呼吸がすべての原動力であることへの意識確認」という記述があった。その他の専攻の教師で1名、大学外レッスンに10年と書いた教師は「喉を開ける」、「あくびの口」といった、声楽専攻の教師に見られる指導法を記述していた。

2. 教師の属性と「独唱・合唱の発声関係で重視する事柄」の関係

(1) 教師の年代(20・30代、40・50代、60・70代)が重視する発声法について

表5から、「独唱 母音の響き」は、20・30代が0.0%、40・50代は33.3%、60・70代は25.0%が重視しており、Fisher 直接法による分析結果、年代と母音の響きは有意な関連があり、40・50代が他の年代より有意に割合が多かった。

(表5) 教師の年代が重視する発声法

	年代A(%) n=15	年代B(%) n=24	年代C(%) n=8	Fisherの直接法 (P値)	
独唱	呼吸法	60.0	41.7	62.5	0.452
	姿勢	46.7	25.0	12.5	0.199
	顔の表情	6.7	8.3	12.5	1.000
	身体の支え	33.3	20.8	25.0	0.745
	母音の響き	0.0	33.3	25.0	0.032 *
	共鳴腔の意識	33.3	12.5	37.5	0.219
合唱	声量	20.0	29.2	0.0	0.282
	呼吸法	46.7	33.3	62.5	0.350
	姿勢	40.0	33.3	12.5	0.454
	顔の表情	6.7	20.8	12.5	0.646
	身体の支え	20.0	29.2	25.0	1.000
	母音の響き	20.0	29.2	25.0	0.902
合唱	共鳴腔の意識	40.0	12.5	37.5	0.099
	声量	20.0	20.8	0.0	0.512

注1)年代A:20・30代、年代B:40・50代、年代C:60・70代

注2)nは度数、*:P<0.05

(2) 主専攻が声楽の教師とその他の専攻の教師が重視する発声法について

表6から、「合唱 声量」では、声楽を主専攻とする教師は0.0%、その他の専攻の教師は25.8%が重視しており、Fisher 直接法による分析結果、その他の専攻の教師は、声楽専攻の教師と比べて声量を重視する割合が有意に多かった。

(表6) 主専攻声楽と主専攻その他が重視する発声法

		声楽(%) n=16	他(%) n=31	Fisherの直接法 (P値)
独 唱	呼吸法	50.0	51.6	1.000
	姿勢	31.3	29.0	1.000
	顔の表情	6.3	9.7	1.000
	身体の支え	25.0	25.8	1.000
	母音の響き	31.3	16.1	0.274
	共鳴腔の意識	18.8	25.8	0.725
	声量	12.5	25.8	0.457
合 唱	呼吸法	56.3	35.5	0.220
	姿勢	31.3	32.3	1.000
	顔の表情	25.0	9.7	0.208
	身体の支え	25.0	25.8	1.000
	母音の響き	12.5	32.3	0.176
	共鳴腔の意識	31.3	22.6	0.725
	声量	0.0	25.8	0.038 *

注)nは度数、*:P<0.05

(3) 教師のレッスン歴(大学と大学外の合計)と重視する発声法について

表7から、「独唱 共鳴腔の意識」では、レッスン歴0~4年は42.9%、5~9年は0.0%、10年以上は18.2%が重視しており、Fisher直接法による分析結果、0~4年の群は他の群と比べて有意に割合が多いという結果であった。しかし、「合唱 共鳴腔の意識」をみると、レッスン歴0~4年は33.3%、5~9年は15.4%、10年以上は27.3%が重視しており、Fisher直接法による分析結果では有意差は見られなかった。また、「合唱 声量」では、レッスン歴0~4年は28.6%、5~9年は7.7%、10年以上は0.0%が重視しており、Fisher直接法による分析の結果、0~4年の群は他の群と比べて有意な傾向があったが、「独唱 声量」では、レッスン歴0~4年は28.6%、5~9年は23.1%、10年以上は9.1%が重視しており、Fisher直接法による分析の結果、0~4年の群は他の群と比べて有意な傾向が見られなかった。

(4) 参考文献・指導法の有無と重視する発声法について

表8は参考文献・指導法の有無と重視する発声法についての分析結果である。「独唱 呼吸法」では、参考有りの群は61.5%、参考無しの群は25.0%が重視しており、Fisher直接法による分析結果では、参考有りの群は無し

の群より有意に割合が多かった。さらに、「合唱 共鳴腔の意識」では、参考有りの群が38.5%、参考無しの群は0.0%が重視しており、Fisher直接法の分析結果では、参考有りの群は無し

(表7) 教師のレッスン歴が重視する発声法

		0~4年 (%) n=21	5~9年 (%) n=13	10年以上 (%) n=11	Fisherの直接法 (P値)
独 唱	呼吸法	42.9	53.8	63.6	0.555
	姿勢	19.0	46.2	27.3	0.254
	顔の表情	4.8	15.4	9.1	0.798
	身体の支え	33.3	15.4	27.3	0.623
	母音の響き	14.3	23.1	36.4	0.381
	共鳴腔の意識	42.9	0.0	18.2	0.011 *
	声量	28.6	23.1	9.1	0.582
合 唱	呼吸法	28.6	53.8	63.6	0.137
	姿勢	28.6	30.8	36.4	0.918
	顔の表情	9.5	15.4	27.3	0.375
	身体の支え	28.6	30.8	18.2	0.827
	母音の響き	28.6	30.8	18.2	0.827
	共鳴腔の意識	33.3	15.4	27.3	0.623
	声量	28.6	7.7	0.0	0.079 *

注)nは度数、*:P<0.05

(表8) 参考文献・指導法の有無と重視する発声法

		参考有(%) n=26	参考無(%) n=16	Fisherの直接法 (P値)
独 唱	呼吸法	61.5	25.0	0.029 *
	姿勢	26.9	37.5	0.510
	顔の表情	11.5	0.0	0.275
	身体の支え	23.1	31.3	0.720
	母音の響き	19.2	25.0	0.711
	共鳴腔の意識	30.8	6.3	0.119
	声量	15.4	37.5	0.142
合 唱	呼吸法	50.0	25.0	0.195
	姿勢	30.8	43.8	0.511
	顔の表情	7.7	18.8	0.352
	身体の支え	26.9	25.0	1.000
	母音の響き	30.8	12.5	0.270
	共鳴腔の意識	38.5	0.0	0.007 *
	声量	7.7	37.5	0.038 *

注)nは度数、*:P<0.05

IV. 考察

(1) 教師の属性について

教師の属性について、声楽専攻は全体の34.0%であったが、大学での声楽レッスンの経験有りの教師は93.6%で、ほとんどの教師が大学で声楽のレッスンを受けていることがわかった。さらに、大学外のレッスン経験有りの教師が71.3%と高い割合であった。

また、参考文献有りの62.0%のうち、大学で習ったことがベースになっている教師が73.0%で一番多く、次いで声楽家の35.0%で、著書は0.0%であった。つまり、多くの音楽教師は、大学や個人レッスンで学んだ体験のみが歌唱指導の根拠としていられる。

(2) 指導歴の長さや指導法について

教師の年代(20・30代、40・50代、60・70代)が重視する発声法については、「独唱 母音の響き」に着目した歌唱指導は、20・30代が0.0%であったのに対し、40・50代の33.3%が重視していた。年代と「独唱 母音の響き」は有意な関連があり、20・30代の教師は「独唱 母音の響き」に着目せず歌唱指導していることが明らかとなった(表5)。教師歴が長いと、母音を重視して指導することで歌唱指導の効果が上がると考える教師が多いということが明らかとなった。

(3) 専攻の違いや指導法について

声楽専攻の教師とその他の専攻の教師が重視する発声法について Fisher の直接法による分析を行った結果では、「合唱 声量」は、声楽専攻の教師は0.0%であったのに対し、その他の専攻の教師は25.8%が重視しており、その他の専攻の教師は、声楽専攻の教師と比べて声量を重視する割合が有意に多かった(表6)。この結果は、声楽を専攻する教師とその他の専攻の教師とで、合唱の指導法で重視することが異なっていることを明らかにした。

著名な声楽指導者であるリチャード・ミラー⁵は著書『上手に歌うためのQ&A』のNo.154で、「教師が目指すのは声を大きくすることではなく、声を自由にして、持てるものすべてを聴かせられるようにすること」と述べているように、大きな声を出す指導ではなく、生徒の声の可能性を開くことが声楽専攻の教師の常識となっており、その差が現れていると思われる。

さらに、歌唱の指導法に関する自由記述では、声楽専攻の教師は「喉の奥を開ける」と書き、それ以外の専攻の教師は「口を大きく開ける」と書いていた。「口を大きく開ける」と「口の奥を開ける」ということでは指導法に大きな違いがある。品川⁶は著書『児童発声』の中で、口を大きく開けるということについて、これを要求する適切な時期、つまり共鳴についての一般的な技術が身についた頃にこそ、大いに強調すべきであると述べている。さらに、酒井⁷は著書『発声技巧とその活用法』の中で、口を大きく開けることは共鳴腔をフルに活用するためと、

舌を自由に活動させるように構えることがその主目的で、不必要に口先ばかり開けたり、下顎を押しつけるような開け方をしたりしないように気をつけることが大切であると述べている。

一方、声楽指導の「参考文献・指導法」が無い教師は、合唱で声量を重視しやすく、また共鳴腔を意識した指導ができていないことが明らかとなった(表8)。しかし、声楽のレッスン歴の違いとの関連で見ると、共鳴腔を意識した指導は、レッスン歴が短い群が必ずしも低いわけではなく、むしろ独唱の場合は、レッスン歴が短い群の方が重視していた(表7)。レッスン歴が短い教師は独唱や合唱の知識を得るために参考文献や参考の指導法に頼っているということも考えられる。清水⁸は著書『必ず役立つ合唱の本』の中で、美しいハーモニーを作り出すためには、「声を響かせる」ということが必要であると述べて、口の開け方や鼻腔共鳴について説明している。さらに、野本⁹は、著書『学級担任のための合唱の本』の中で、発声法のポイントを、「呼吸」「振動」「共鳴」と述べており、どちらの著書にも共通して共鳴についてその重要性を述べている。また、佐々木(2015)¹⁰は、中学校コーラス部の生徒を対象にした調査で、生徒が歌唱時に意識しているポイントは「声の大きさ」、「音程」、「声の響き」であると述べ、それらをふまえた授業実践を行った結果、授業後、「授業前と比べて声に響きがついた」、「高い音が楽に歌えた」など、発声上の変化や発声への効果についての成果を報告した。このように、最近の著作物や調査研究からも、共鳴腔を意識した指導法が有効であると示されており、レッスン歴の短い教師が、独唱・合唱初心者に共鳴を意識させる指導を試みて、その効果を実感したと思われる。

V. まとめ

高等学校の音楽教師に向けて行った質問紙調査から見てきたことについて、まとめてみる。

まず全体集計から、教師は大学や個人レッスンで学んだ体験のみが歌唱指導の根拠としていられるということが問題点として浮かび上がった。さらに、自由記述では、声楽専攻とそれ以外の専攻とで指導法に違いがあることが示された。

次に、教師の属性と重視する発声法についての分析では、20・30代の教師は「独唱 母音の響き」を重視して指導していないということ、声楽専攻の教師は「合唱

声量」を重視していないことがわかった。しかし、「独唱 共鳴腔の意識」では、レッスン歴が短い群が長い群に比べ有意に割合が多かったことから、レッスン歴が短い教師は独唱や合唱の知識を得るために参考文献や参考の指導法に頼っているということも考えられた。

以上のことから、専攻や年代、レッスン歴の違いによ

って指導法に差異があるという問題点が浮かび上がったことと、「母音の響き」と「共鳴腔の意識」が指導の手がかりとなることが分かった。

今後は、この手がかりをもとに、具体的な指導方法の検討とそれを実証していく実験研究が必要であろうと言えよう。

謝辞

この場をお借りいたしまして、本研究の調査にご協力いただきました音楽教師の皆様にご挨拶申し上げます。

【注】

高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）文部科学省, 2009, p. 98

音楽 I 内容 A 表現 (1) 歌唱

ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。

イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。

ウ 様々な表現形態による歌唱の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

【引用文献】

- 1) 高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）文部科学省, 2009, p. 98
- 2) 若井健司「小学校教員養成のための歌唱指導」『香川大学教育実践総合研究』28, 2014, pp. 67-77

- 3) 内田恵美子・大川晶也「発声テキストの導入と効果—アンケート調査を通して—」『東海学院大学短期大学部紀要』45, 2019, pp. 9-16
- 4) 早川倫子・虫明真砂子「歌唱指導における教師力の育成について～免許状更新講習の実践を通して～」『岡山大学教師教育開発センター紀要 第 2 号 別冊』2012, pp. 60-70
- 5) リチャード・ミラー、岸本宏子・長岡英訳『上手に歌うための Q&A 歌い手と教師のための手引書』音楽之友社, 2009, pp. 246-247
- 6) 品川三郎『児童発声』音楽之友社, 1956, pp. 60-61
- 7) 酒井弘『発声の技巧とその活用法』音楽之友社, 1974, p. 68
- 8) 清水敬一『必ず役立つ 合唱の本』株式会社ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス出版部, 2013
- 9) 野本立人『必ず役立つ 学級担任のための合唱の本』株式会社ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス出版部, 2015
- 10) 佐々木直樹・玉野佑佳・竹内美咲、伊東薫「教員養成課程における発声指導の考察(2) —発声理論と発声器官に着目して—」『教育臨床総合研究 14 2015 研究』, 2015, pp. 191-205

【連絡先 澤田 育子

Email : ikukosawada595@icloud.com】

資料

歌唱(独唱・合唱)に関するアンケート

以下の問に選択肢がある場合、該当するものに○、優位順を求めるものは数字、記述を求める質問は自由にお書きください。

- 先生個人についてお教えてください。
 - 職名: 教諭・講師
 - 性別: 男・女
 - 何歳代ですか: 20代・30代・40代・50代・60代・70代
 - 部活動の顧問をされている場合の部活動名: _____部
 - 大学での専攻(器楽の場合は楽器名・声楽の場合は声種): _____
()
 - 大学の授業で声楽のレッスンを受けた経験: 有・無
 - (6)で有の場合、習った期間 年数: _____年 _____月
 - 大学外で声楽のレッスンを受けた経験: 有・無
 - (8)で有の場合、習った期間 年数: _____年 _____月
- 発声や歌唱指導において参考としている指導法や文献はありますか: 有・無
有の場合はその詳細について、あてはまるもの(A~C)に○をつけてください。
 - 主に大学で習ったことがベースになっている。
 - (著者: _____)の著書を参考にしている。
 - (声楽家: _____)の指導を参考にしている。
- 先生が考えておられる、独唱での良い歌声とはどんな声ですか。
以下の項目の中から、優位順に()に1~3を記入してください(3位以内)。
 - 響く声() ・透明感がある声() ・音域が広い声()
 - 柔らかい声() ・輝かしい声() ・優しい声()
 - ダイナミクスがつけられる(音量がある)声() ・支えのある声()
 - その他 _____ ()
- 先生が考えておられる、合唱での良い歌声とはどんな声ですか。
以下の項目の中から、優位順に()に1~3を記入してください(3位以内)。
 - 響く声() ・透明感がある声() ・音域が広い声()
 - 柔らかい声() ・輝かしい声() ・優しい声()
 - ダイナミクスがつけられる(音量がある)声() ・支えのある声()
 - その他 _____ ()
- 授業での歌唱指導の目的(ねらい)は何ですか。重要視されている順位順に()に1~3を記入してください(3位以内)。
 - 自己のイメージをもって表現すること。
 - 曲想と音楽の構造や歌詞について理解すること。
 - 曲種に応じた発声について理解すること。
 - 様々な表現形態による歌唱表現について理解すること。
 - 曲にふさわしい発声の技能を身につけること。
 - 他者との調和を意識して歌うこと。
 - 表現形態の特徴を生かして歌うこと。
 - その他: _____
 - その他: _____
- 独唱の授業で重要だと考えておられることは何ですか。<表現関係>と<発声関係>それぞれについて、重要視されている事柄について()に○を記入してください(各2つまで)。
 - 表現関係
 - 自己のイメージを生かす表現() ②作詞・作曲の意図をくんだ表現()
 - ③フレーズング() ④ダイナミクス() ⑤語感()
 - ⑥その他 _____ () ⑦その他 _____ ()
 - 発声関係
 - ①呼吸法() ②姿勢() ③顔の表情() ④身体の支え()
 - ⑤母音の響き() ⑥共鳴腔の意識() ⑦音量()
 - ⑧ その他 _____ () ⑨その他 _____ ()
- 合唱の授業で重要だと考えておられることは何ですか。<表現関係>と<発声関係>それぞれについて、重要視されている事柄について()に○を記入してください(各2つまで)。
 - 表現関係
 - 皆でイメージを考えた表現() ②作詞・作曲の意図をくんだ表現()
 - ③フレーズング() ④ダイナミクス() ⑤語感()
 - ⑥まわりの声を聴くこと・一体感() ⑦ハーモニー()
 - ⑧その他 _____ () ⑨その他 _____ ()
 - 発声関係
 - ①呼吸法() ②姿勢() ③顔の表情() ④身体の支え()
 - ⑤母音の響き() ⑥共鳴腔の意識() ⑦音量()
 - ⑧その他 _____ () ⑨その他 _____ ()

- 速くに響く声にシンガーズフォルマントという音響的特徴がありますが、ご存じですか。
A 知っている B 知らない

- 歌唱の授業で、生徒の声が良くなったと実感が持てた指導法がありましたら教えてください。

- 歌唱の授業で、速くに響く声にするためには、どのような指導が有効であると思われますか。実際に行っていらっしゃるがありましたら、教えてください。

- その他、歌唱指導について先生が感じていらっしゃる事柄など、自由に記述してください。

アンケートは以上ですが、詳しくお話を聞かせてもらえる場合は、下記にご連絡先をご記入くださいますよう、お願い申し上げます。送付締め切りは、令和2年2月18日です。お忙しい中、ご協力くださりましてありがとうございました。

先生のご連絡先(メールアドレスなど): _____

Research on Singing Instruction of High School Music Teachers

Ikuko Sawada

Cooperative Doctoral Course in Subject Development in the Graduate School of Education,
Aichi University of Education & Shizuoka University

ABSTRACT

This study conducts a questionnaire survey of music teachers in public and private high schools (including part-time and correspondence systems), explores problems in singing instruction in high schools, and examines data for clues that lead to effective instruction methods.

The results of the survey revealed that many teachers used only the techniques learned in college and private lessons as the basis for singing instruction. It was also shown that there are differences in specific teaching methods between vocal major teachers and other teachers.

As a result of analyzing the relationship between teacher attributes and vocalization methods, teachers in their 20s and 30s do not teach by emphasizing the sound of vowels, and vocal major teachers do not emphasize the vocalization method of raising the volume when using choral activities. Moreover, there were differences in teaching methods due to differences in age and subject major. Furthermore, it was shown that teachers with little lesson history emphasize the awareness of resonance cavities by solo singing, and teachers with references and guidances emphasize the resonance cavities by chorus. Additionally, the awareness of resonance cavities is used for teaching solo and chorus beginners. The results suggest that it is effective to make teachers aware of this, and that it is a teaching method that produces results even if they are not specialized in vocal major.

From now on, I think it will be necessary to study singing teaching methods based on “the sound of vowels” and “the awareness of resonance cavities”, and experimental research to prove them.

Keywords

Questionnaire survey, High school, Music teacher, Singing instruction